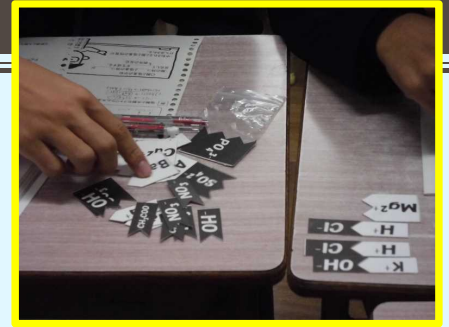


# 「高校生のための学びの基礎診断」 検討ワーキング・グループ（第4回）

平成29年（2017年）10月24日（火）



滋賀県立玉川高等学校



## 【本日の配付資料】

資料2-1

本資料

資料2-2

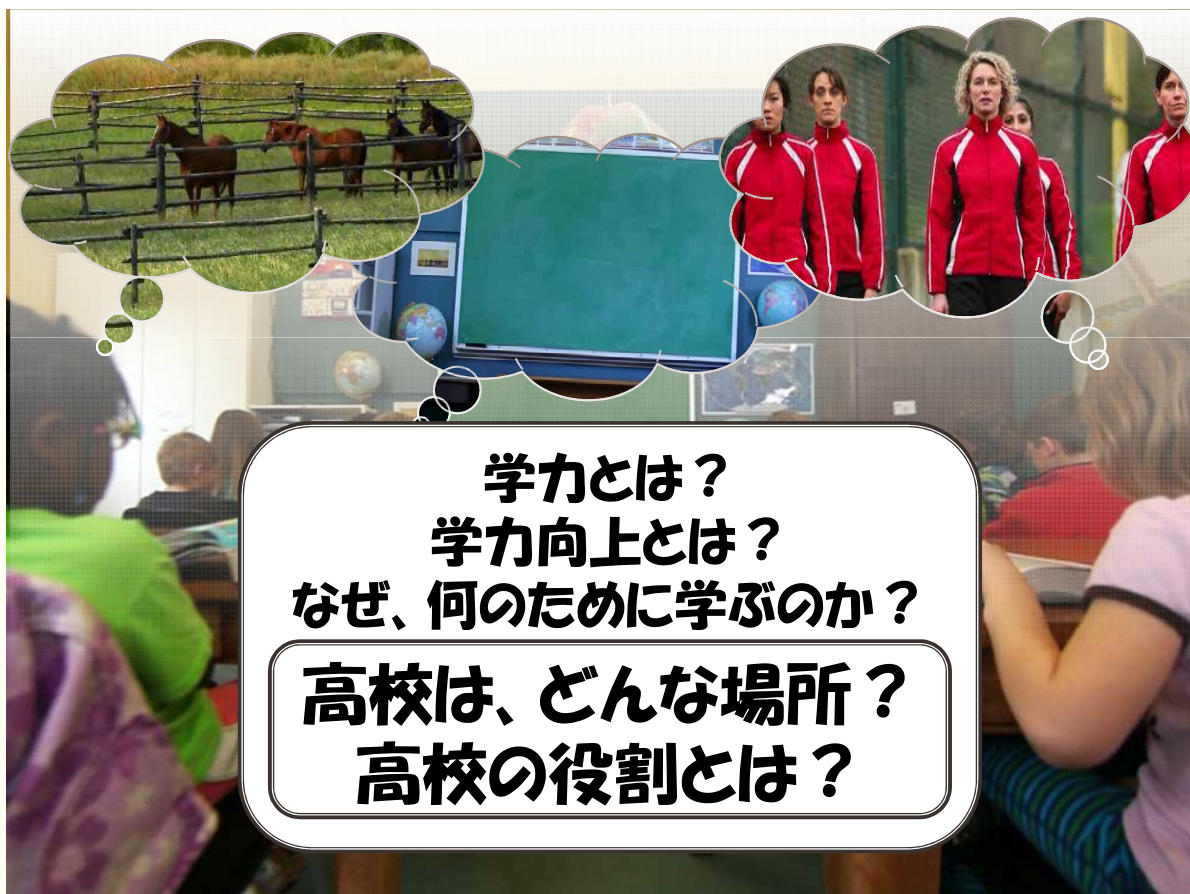
「平成29年度（2017年度）  
高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための  
調査研究事業」

資料2-3

「滋賀県モデル CAN-DOリスト」

資料2-4

「玉川高等学校 <生徒の成長モデル>」（案）



(1)

## Contents

- 1) 今、どのような学力が求められているのか？
- 2) 本校の現状、成果と課題
- 3) 基礎学力の定着に向けた本校の取組
- 4) 「高校生のための学びの基礎診断」に期待すること

(2)

# 事業指定を受け、取組の方向性の “よりどころ”としたのは・・・

(3)

Shift Happens・・・<今、どのような学力が求められているのか？> ①

## 次期学習指導要領

### 学習指導要領改訂の方向性

必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする  
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる  
思考力・判断力・表現力等の育成

### 何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、  
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

### 何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた  
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の  
新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造  
的に示す

学習内容の削減は行わない。

### どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・  
ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得  
など、新しい時代に求められる  
資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高  
い理解を図るための学習過程  
の質的改善



平成20年  
学校教育法 改正  
<第三十条 第二項>  
【学力の重要な3要素】  
【生涯にわたり学習する基盤が  
培われるよう・・・】

平成21年3月  
高等学校学習指導要領  
改訂  
【生きる力】【言語活動の充実】

(4)

# Shift Happens … <今、どのような学力が求められているのか？> ②

## 次期学習指導要領【改訂までのスケジュールを見すえて…】

平成29年 告示 → 平成30年～ 周知  
 → 平成31年～33年 教科書の作成・検定・採択・供給  
 → 平成34年～ 年次進行で実施

↓ H28.8 (株) ナガセ「教育改革先取り対応セミナー」京大大学院 石井英真准教授による特別講演の内容を参考に作成

	現行	Keyword	次期(=改訂後)
学力観	「知識・理解 → 活用」 「思考力・判断力・表現力」		「学力の三要素」 「コンテンツ」・「コンピテンシー」
授業観			「主体的・対話的で深い学び」 (アクティブラーニングの視点に立った学び)
評価観	「目標-指導-評価の一体化」 「観点別学習状況の評価」		「多様で多面的な評価」 「パフォーマンス評価」
学校経営	「共通性と多様性」「コア」		「カリキュラム・マネジメント」

文言の変化 = ①流れが大きく変わったのではなく、[より一層変化を促している]ということ。  
 ②[「学習者主体」の学びへ]という方向性が、さらに明確になったということ。

(5)

# Shift Happens … <今、どのような学力が求められているのか？> ③

## <高大接続改革>の方向性

↓ 高大接続システム改革会議「中間報告」資料から抜粋

高大接続システム改革の全体イメージ～主体性を持って、多様な人々と学び、働くことのできる力を育む～

高等学校教育	大学入学者選抜	大学教育
<b>教育内容の見直し</b> →次期高等学校学習指導要領の改訂など 【H26.11～中教審教育課程企画特別部会で審議中】 ・教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた学習指導要領等の基本的な考え方を明確化 ・育成すべき資質・能力を踏まえた、教科・科目等の見直し  <b>学習・指導方法の改善と教員の指導力向上</b> →教員の養成・採用・研修の見直しなど 【H26.7～中教審教員養成部会で審議中】 ・学習・指導方法の改善に対応するための教員の指導力の向上  <b>多面的な評価の推進</b> →学習評価の改善 【詳細はH27秋頃から高大接続システム改革会議評価検討ワーキング・グループで検討予定】 ・学習評価の在り方の見直しや指導要録の改善により、生徒の多様な学習活動・成果が反映されるよう改善(さらに、調査書等に適切に反映)  →多様な学習成果を測定するツールの充実 ・生徒の基礎学力の確実な育成のための高等学校基礎学力テスト(仮称)の導入 ・農、工、商業などの検定試験や英語などの民間検定の利活用の促進	<b>個別選抜の改革</b> ポリシーに沿った選抜  各大学において、アドミッション・ポリシーに基づき、例えば、下記の方法から ・活用する評価方法・比重 ・要求するレベル 等を決定・公表  ア 大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の結果 イ 自分の考えに基づき論を立てて記述させる評価方法 ウ 高校時代の学習・活動歴 ・調査書 ・活動報告書(個人の多様な活動、ボランティア・部活動・各種団体活動等) ・各種大会や顕彰等の記録 ・資格・検定試験の結果 ・推薦書等  エ エッセイ、大学入学希望理由書、学修計画書 オ 面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション  <b>大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の導入</b> ◆調査書の改善 ◆個別選抜の改革の支援 (面接等の手法や評価方法の開発、アドミッション・オフィスの整備・強化)	<b>アドミッション・ポリシー</b> 以下の三要素について各大学で具体的にどのような能力をどのレベルで求めるのかを明確化  ①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ※①を基礎にして差が一つに定まらない問題に自ら解を見出していく思考力・判断力・表現力等の能力 ③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度  <b>カリキュラム・ポリシー</b> 各大学において、それぞれのディプロマ・ポリシーを踏まえ、どのようなカリキュラムを編成し、教育を行うかの方針を明確化  ○カリキュラムの体系化 ・多様な背景を持つ学生を大学教育に円滑に移行させるための「初年次教育」の充実 ・明確な方針に基づく教養教育と専門教育の充実 ・学生の履修・学修支援の充実など  ○卒業後を見据えた社会との連携強化  <b>ディプロマ・ポリシー</b> 各大学において、どのような能力を身に付ければ学位を授与するのかという方針を明確化  ○卒業に必要な要件の明確化と厳格な卒業認定
	右の三要素を左のような方法で評価	◆学修成果の把握・評価(アセスメント・テスト、学修行動調査、ルーブリック等) ◆教職員の資質・能力の向上(FD・SDの充実、教員の教育実践研修の充実) ◆高度専門職(ハイテク・イノベーション、デジタル・フューチャ、R&D)の育成・制度強化 ◆大学における教育条件整備(学生の多様なニーズへの対応) ◆高大接続システム改革の目的と内容を実現する新しい認証評価制度の具体化と適切な評価 【詳細は中教審大学分科会大学教育部会で検討予定】

(6)

玉川高校の目指すところは



＜本校生徒の長所＞

～生徒の自己分析+教職員の実感～

- まじめ       穏やか
- 心優しい    ていねい
- 指示にはきっちり従う

でも...

- ☹️ 自分の考えや個性は？
- ☹️ 思考し判断している？
- ☹️ 主体性や意欲はある？
- ☹️ 対話的に協働できる？
- ☹️ 学びは深まっている？

今あるデータで、見えること... ①

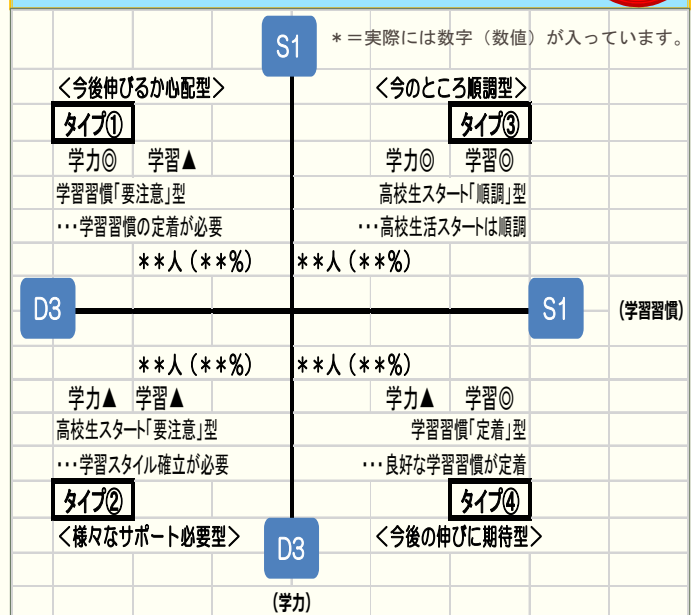
Benesse スタディーサポート結果 (2016度 1年生第1回)

入学年度	2016		2015		2014		※進研模試 偏差値 の 目安
生徒数	320人		321人		361人		
平均点	***		***		***		
ゾーン	単純	累積	単純	累積	単純	累積	
S1							78.0～
S2							73.0～
S3							69.0～
A1	***	***	***	***	***	***	65.0～
A2	***	***	***	***	***	***	61.0～
A3	***	***	***	***	***	***	58.0～
B1	***	***	***	***	***	***	54.0～
B2	***	***	***	***	***	***	50.0～
B3	***	***	***	***	***	***	46.0～
C1	***	***	***	***	***	***	43.0～
C2	***	***	***	***	***	***	41.0～
C3	***	***	***	***	***	***	39.0～
D1	***	***	***	***	***	***	37.0～
D2	***	***	***	***	***	***	35.0～
D3	***	***	***	***	***	***	～34.9

・昨年度生と比べると...  
・経年変化を見てみると...

分析結果

・学習量が...  
・学習習慣は...



・「テスト(考査等)の後の振り返り」や、  
「学習計画の見直し・改善」は...

# 今あるデータで、見えること・・・②

↓ \* =実際には数字(数値)が入っています。

## Benesse GTEC for STUDENTS

実施時期 実施回	前回 16年 9月 30B			今回 17年 3月 31B			前年度生 16年 3月 29B			高1全国
	人数	スコア	グレード	人数	スコア	グレード	人数	スコア	グレード	スコア
トータル	320	***	*	314	***	*	307	***	*	***
リーディング (WPM)	320	***	*	314	***	*	307	***	*	***
リスニング	320	***	*	314	***	*	307	***	*	***
ライティング	320	***	*	314	***	*	307	***	*	***

分析  
結果

1年次9月→1年次3月=半年で、  
トータルスコアが○ポイント伸びた。  
(○ポイント=概ね1年で伸びる数値)

C

生徒には<伸びるポテンシャル>がある。  
授業改善や活動の工夫等がポイント!

では、教科や学校として・・・

- ★どの取組が効果的だった?
- ★「目標-指導-評価」の一体化は?
- ★授業デザインは?
- ★意義・目的の共有は? など



A→P→D

(9)

では、

<今、求められている学力>に沿った  
“測定ツール”とは、どのようなものか?

「**高校生のための学びの基礎診断**」  
は、<何をもち、どのような力を見取れるもの>になるのか・・・【期待】

シート(10)の〈本校生徒の長所〉で挙げたように、「まじめ」、「穏やか」、「心優しい」、「ていねいに取り組む」、「指示にはきっちり従う」

・・・まさにそのとおり。長所はいくつもあります！

しかしながら、教職員の中では、長所である本校生徒の傾向について、〈長所も、過ぎれば課題になってしまうのではないか〉という声が出はじめていました。

そんな中、平成28年度に、  
文部科学省「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」  
の実践研究校として、指定を受けました。



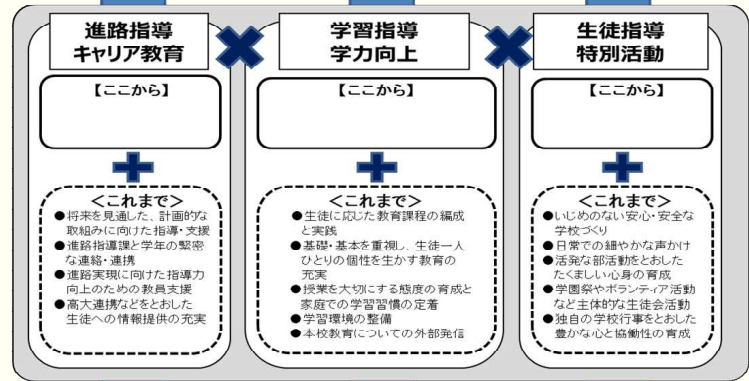
Do it here,  not later!



〈急速・激進に変化する社会〉 〈生涯学び続け、LIFETIMEできる人材〉  
知識基盤社会に生きる【Life-long Learner】の育成



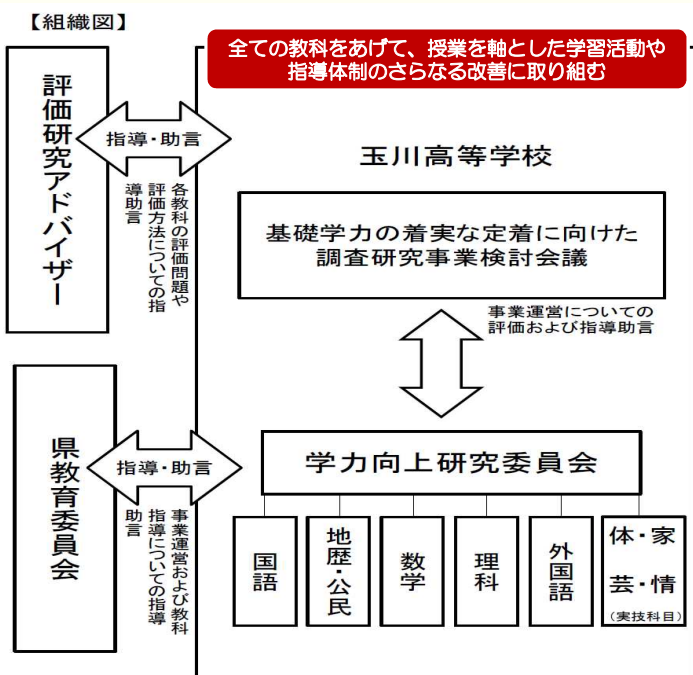
学力の向上、思考力・判断力・表現力の育成  
豊かな人間性の育成、コミュニケーション能力の育成  
社会への貢献、地域・保護者からの信頼



教育目標：人間性豊かで社会に貢献できる人材の育成  
を目指し、明るい学園づくりに努める。  
重点目標：知育・徳育・体育の調和のとれた人間教育  
○ 学力の向上と希望する進路の実現 ○ 規範意識や人権意識の育成 ○ 部活動の活性化  
「大切にする」指導 / 「協議・協力・協調」

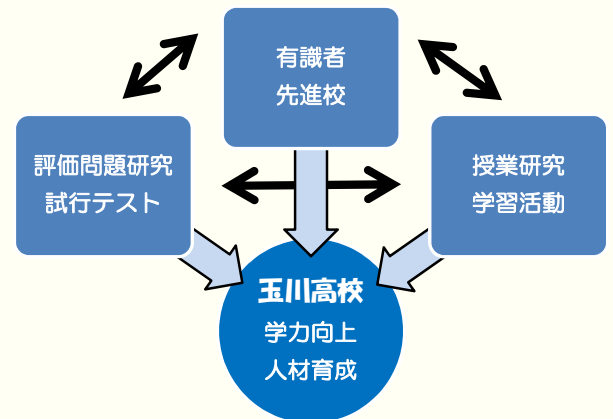


【調査研究の組織図 (平成28年度)】



※「調査研究事業検討会議」とは、研究開発の内容や進捗状況について、指導・助言を受け、評価・改善を行うためのもの。教育の専門家などの有識者を含む。

【調査研究の概要 (平成28年度)】



- ◆ 校内中心のもの
  - 年間調査研究計画の策定(内容・時期・方法)と見直し
  - 教材、学習方法、指導方法、考査、評価方法等に関する調査研究および報告
  - 校内指導体制の構築
  - \* 校内委員会(学力向上委員会)の開催
  - \* 授業研究会および教員研修の実施
- ◆ 校内および対外的なもの
  - テストや教材を用いた、基礎学力の定着の測定・分析
  - 本校考査問題、入試問題等の提供
  - 学習指導要領および「基礎学力テスト」の趣旨を踏まえた問題作成
    - 試行テスト(試行版「基礎学力テスト」)の問題に活用される可能性
  - 試行テスト(試行版「基礎学力テスト」)の受検
  - HP等を活用した研究内容・研究結果の周知
  - 先進校視察、他校との交流(視察受け入れ含む)
  - \* 調査研究事業検討会の開催
  - \* 中間まとめ、実施報告書(研究報告書)の作成

事業指定1年目の平成28年度は、「走りながら考える、考えながら走っている」  
 (学力向上研究委員会でも、よく出てきた言葉です)・・・そんな1年でした。そして、指定2年目へ！



玉川高で学テ試行調査  
 文科省、19年度導入目指す

**Shift Happens・・・今は大変革の時。社会の要望と期待を受け、高校はどんな場所に？**

- ◎知識だけでなく、学ぶ方法や姿勢を身につけることができる場所
- ◎答えを引き出すだけでなく、考えを引き出す授業が行われている場所
- ◎「知る・覚える」だけでなく、「理解する・考える」授業を受けられる場所

生徒の学力向上と自己実現のためには、  
**「進路実現のために必要な学力をつけること」**  
だけでなく、  
**「大学や社会につながる学びを行うこと」**が必要

**「主体的・対話的で深い学び」の実現へ**

(13)

生徒の学力向上と自己実現のためには、  
**「進路実現のために必要な学力をつけること」**  
だけでなく、  
**「大学や社会につながる学びを行うこと」**が必要

資料2-2

平成29年度（2017年）  
 高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業  
 滋賀県教育委員会（文部科学省指定事業）

調査目的：人間的豊かさに貢献できる人材の育成を目指し、確かな学力の習得につなげる。  
 調査対象：授業・学習・授業の調和のとれた人権教育  
 ◎学力の向上と伴う学習の状況 ◎授業改善や人権教育の推進 ◎生徒の学びの場  
 【大規模な調査】/【協議・協力・連携】



**平成29年度は**

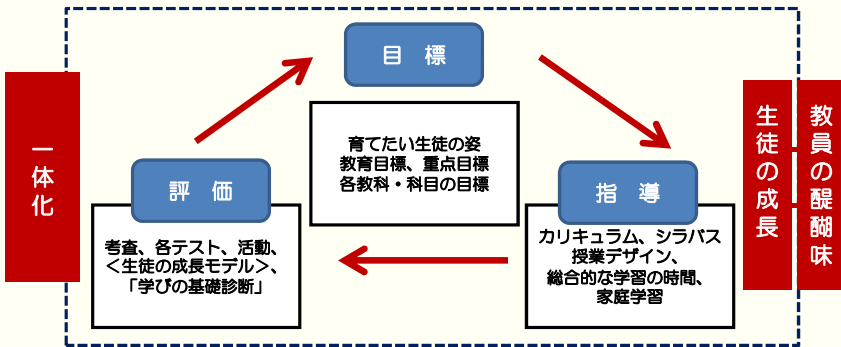
**【調査研究の視点①】**  
 学校教育活動全体を通した  
**“大学や社会につながる学び”の実現**

**【調査研究の視点②】**  
 明確な教育ビジョンに基づいた組織的で  
**継続的な取組の推進**

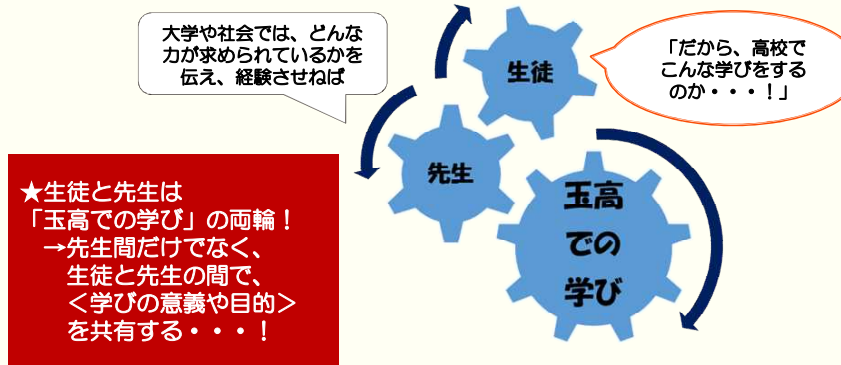
(14)



【学力向上の土台①：目標－指導－評価の一体化】



【学力向上の土台②：学びの意義や目的の共有】



<主に「C」→「A/P/D」につながるもの>

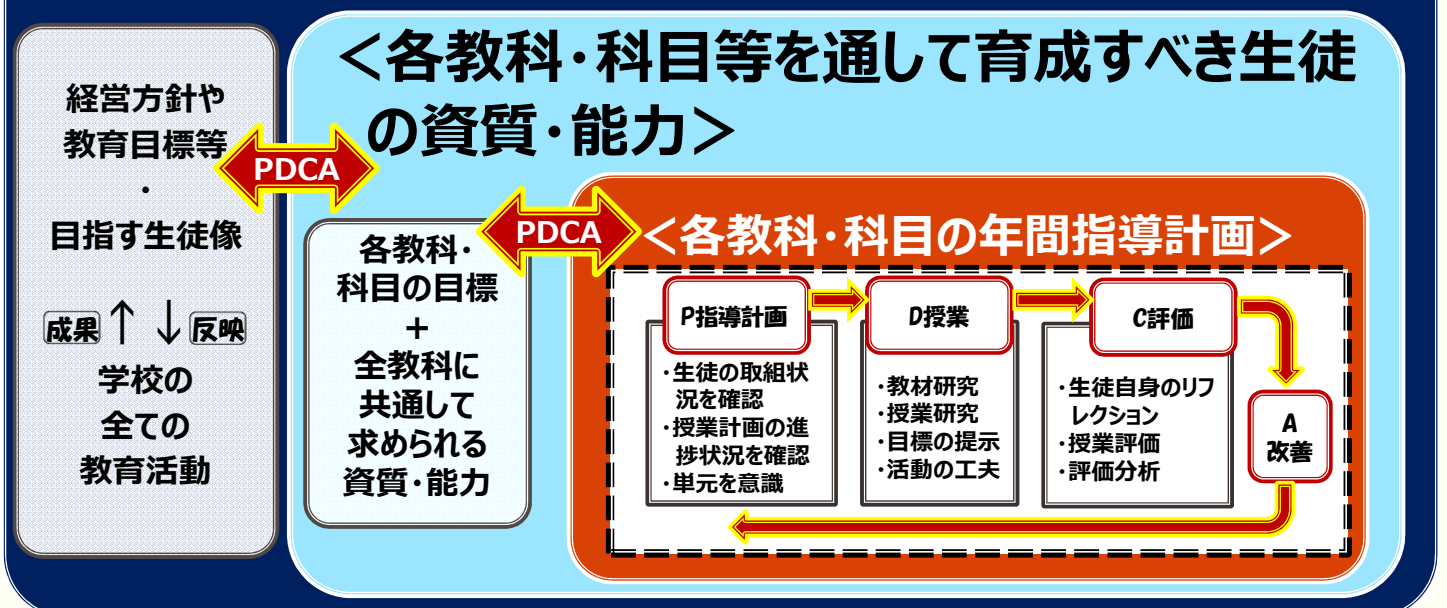
- 「評価問題」の作成、分析の共有、データ蓄積
- リフレクション（生徒、教員）の実施・活用
- 授業評価（生徒）の実施・活用
- アンケート調査（生徒、教員）の実施、分析の共有
- 外部試験の実施・活用
- 「高校生のための学びの基礎診断」の実施・活用
- 玉川高校<生徒の成長モデル（評価指標）>の作成 など

<主に「P」→「D/C/A」につながるもの>

- 教材研究、授業研究、活動の工夫、データの共有
- 教員研修、授業研究会の実施（校内外公開）
- 校内公開授業月間（3人組、異教科間、強化テーマ）
- 「全員がアクティブ実践者DAY」の設定
- 先進校視察
- ICTの導入と活用（モニター、テレタッチ、iPad）
- 玉川高校「授業づくりBOOK」（仮称）の作成
- カリキュラムの見直し・再編
- 総合的な学習の時間、LHRの見直し・再編<土台づくり>
- 「45分×7限」についての検討
- 「高大接続研修」の実施（関西大学での現地研修 = 大学生LAとともに、アクティブラーニングの視点に立った授業やラーニングカフェを体験） など

【学力向上の土台③：さまざまな段階で、PDCAサイクルを好循環で回し、カリキュラム・デザインを確立する】

<本校の“学びの設計図”（グランドデザイン）>



## 実施団体における主な取組

## ■授業改善・学習改善

## ○アクティブラーニング型授業を取り入れた授業研究

※一部、次のとおり発表があった。

「アクティブラーニングをすることで生徒の基礎学力が身に付く」と安易に考えるべきではなく、生徒に達成感、自己肯定感を持たせる意味で、生徒をどう本気にさせるかの仕掛けの工夫、「本当に頑張る態度」を教師が本気になってどう育てていくかが鍵。

## ○ICT機器の活用による授業改善

※一部、次のとおり発表があった。

ICTを用いた取組について、1年間の成果を振り返ったところ、一部の教科では成績の伸びが見られたが、総合的にみて、学習改善がなされたとは言えない。その原因を分析すると、それ自身が目的のようには見え、生徒・教員が一体となった取組を十分に進めることができなかったのではないかと認識に至った。今年度は、「わかる授業」を実践し、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善に取り組むという大枠の中でICT教材をツールとして活用する。

## ○ICT環境の整備を中心とした指導体制の在り方の検討や教材開発を進める。

## ○生徒の学習履歴やテスト結果をデータベース化し、個々の生徒の学力に応じた学習教材を開発。

## ○家庭学習を中心とした予習・復習のための教材の開発。生徒にとって身近な通信機器を用いることによって、生徒の興味や関心を喚起することができるか、生徒間や生徒・教員間で意見交換を円滑に行うことで、激励や効果的な助言による学習意欲の向上が見られるか等の検証。

## ○授業改善の取組について、教職員の個業から組織的な取組へ発展させる。

## ○各教科の取組が教科を越えての共有がされることが課題。

## ○集中して中学の学び直しを行った結果、他の高校に通う生徒と比べた時に、なぜ高校の勉強をまだ全然やらないのか、との声があり、生徒の学ぶ意欲をそくことになっていないかとの意見もある。

## ○朝自習の活用

## ○校内研究授業、授業公開週間の設定

※一部、次のとおり発表があった。

教科の枠を越えた授業参観を推進するため、参観者が気付いたことをメモして授業者に渡すワークシートを作成。

# 他の実践研究校の取組にも 学んだい教わりたいしたいです・・・!

## ■PDCAサイクル

## ○教育課程やシラバスのような年間を通したものでなく、各学期や各単元や一つの授業など、様々な段階で実施を検討

## ○CからA、AからPがつながりにくいように感じるが、これがサイクルになったものが、評価の視点を明確化し、次の目標にいかにかわりやすく生かすかが重要。

## ○まず計画の段階で基礎学力の定着に向けた授業の計画、現状分析の把握、その分析結果を踏まえ、明らかになった課題についての「D」の教育活動の実践、テスト等を活用して、いかに力が付いているかを測る「C」、それに基づいて更にアクションを起こして「A」を構築する。

## ○「C」について、民間アセスメントをツールとして活用し、その分析を「A」につなげるための研修を企画中。

## ○テストを実施しても、それがうまく活用できているか、「C」から「A」につなぐところが課題

## ○生徒は、A(授業の学び・学力向上の取組)、B(探求的な学び)、C(進路学習、将来の目標に向けた取組)及びD(部活動・行事等における学び)の4セクションにおける活動に取組み、その成果をポートフォリオとしてストックしながら、目標を持った高校生活を送る(将来の目標を考え、自分が今何をすべきか、何が自分に足りないかを考え、自己調整する)。

## ○「D」については授業改善と授業外学習(近くの大学生が来て生徒に教えてもらえる)の取組

## ■評価等

## ○授業の振り返り、リフレクション、単元を意識した授業づくりを重点化し、評価をどう生かすか、評価指標の作成を行う予定。

## ○多様な評価の実践。「生徒に夢と勇気、やる気をもたせるものさし」づくりに向けて、評価規準に対応したレベル(基礎・応用・発展)ごとの判定基準を作成する予定。

## ○観点別学習状況評価に基づくシラバスの完成と授業実践

## →授業の目標・狙いが明確になり、ルーブリックを生徒に事前に示すことにより、何ができて何ができていないのか、何を頑張ればいいのか理解しやすくなり、授業に前向きに取り組むようになった。

## ○卒業時、各学年終了時における到達目標の設定。英語の「CAN-DOリスト」のようなものを他教科にも広げる。「めあて(本時の目標)」の掲示を徹底し、それが達成できたかどうかをアンケートで振り返り。

(17)

## ■学校独自の「学力スタンダード」等の作成

## ○実践研究校の生徒が必要とする基礎学力の明確化・可視化を目的として「基礎学力リスト」を作成し、指導計画の立案や学校設定教科・科目の教材作成等の参考とする。

## ○外部有識者から、同校が考える基礎学力とは何か。目標と指導と評価が一体化しなければならぬ等の指摘を受け、スタンダードの作成を検討。

## ○普通科と専門科のつながりをより意識した指導を行うため、「課題研究充実のための基礎力マップ」(専門教科の中で、このようなところで普通教科のこのような力が必要であることを示したものを)を作成する予定。

## ■学び直し教材の活用

※一部、次のとおり発表があった。

## ○学び直し教材を用いて、授業担当者が実際の課題を把握することを目的に、自ら採点する取組を行った(ただし、教員の疲弊の課題あり。)

## ■生徒の学習意欲喚起

## ○各種資格の取得の推進

## ○パフォーマンス課題をカリキュラムに位置付ける(逆向き設計論)取組。「本質的な問い」からパフォーマンス課題を考え、それを単元末の目標として各授業を組み立てる。

(例)コミュニケーション英語Ⅰの日本文化紹介のスピーチの授業で、最初に原稿作成→ペアで練習→グループ練習→クラスでスピーチできるようにステップアップしていくことにより、生徒のモチベーションが非常に上がっていた。

## ■家庭学習習慣の定着

## ○タイムマネジメントを図るための「今→未来手帳」の活用。

## ○生徒の一週間の学力定着を図る小テストの作成。

## ○ICT教材の導入・検証

→学習週間の定着には結び付きにくかったことを踏まえ、平成29年度は、各教科が連携して毎週末に生徒に週課題を出し、翌週最初の授業で小テストを実施・評価する取組を実践し、家庭学習習慣の定着の状況を調査予定。

## ■地域の小中学校との連携

## ○相互に授業を公開し、生徒の学習について意見交換

## ○数科教育段階での学習内容の学び直しの際の有効な指導方法、全国学力学習状況調査の結果に基づくPDCAサイクルへの活用、多面的な評価について知見を得る。

## ■学校設定科目の設定

## ○学校設定科目や様々な教科・科目の授業の中で、調べ学習、課題研究を行った上でプレゼンテーションをする取組を実施

## ■その他

## ○各定期考査のすべてのテストにおいて、思考力・判断力・表現力を問う問題を出題。

## ○授業中に教員が発する「問い」の研究。どうい「問い」を投げかければ思考が深まるか、学ぶ意欲が湧くのか。

## ○広島県が推進している「ICEモデル」を活用した研究

## ○思考力、判断力、表現力を問う問題の作成に関する研究

## ○モジュール学習(朝の時間こーか月分のシートを渡し、朝の連絡を聞き取る。シートの最後に簡単な四則計算や一般常識問題などを取り入れる。)やICTを活用した授業の実施

## ○定期考査において、「思考力・判断力・表現力等」を問う問題を必ず入れているが、今後は、このような問題をどのような要因で入れて、生徒の学習結果を見て、学校が重視したことが本当に身に付いているかどうかといったことを把握していく。

## ○民間アセスメントの結果を踏まえ、基礎学力の定着の状況、学力ゾーンによる生徒の進み、授業の取組の様子、学習習慣の定着、定期試験など様々な観点からの分析を実施。

(18)

# 昨年度、試行調査を実施して・・・

## 「高校生のための学びの基礎診断」



(19)

### 「高校生のための学びの基礎診断」に期待すること① ～昨年度、試行調査を実施して～

#### <感想や状況・1>

- feasibility調査であったこと、また、調査前の段階では、フィードバックの方法や内容、時期もまだ検討中という段階であったので、直接成績に反映させることはしていない。
- 実施時期 = 年度末  
結果返却の時期 = 年度を超えていた

#### <感想や状況・2>

- 生徒および保護者に対して事前に、実施目的や内容について説明した。
- 本校では、外部試験や学習状況調査を年間複数回実施しているため、生徒は、テストやアンケートの実施について、特に大きな抵抗はなく、混乱は見られなかった。

★<意義や目的><何が測れて、学校としてどう活かすか>を、教職員が十分理解し、それを生徒や保護者にきちんと説明できるものかどうか。(学校には、そうする責任がある。)

★結果や分析内容を「C」に位置づけ、「生徒の学力向上」と「教職員の指導改善・授業力向上」に活かせるものかどうか。また、ポートフォリオ的に積み上げていけるのか。

・・・実施時期、ねらい・内容、結果返却の時期や内容 / 学びの過程や経年変化の見取り (20)

## 「高校生のための学びの基礎診断」に期待すること② ～昨年度、試行調査を実施して～

### <感想や状況・3>

- 生徒や保護者へは、「このテスト（調査）は、全国で今後の実施が検討されているもので、本校は先進的に実施をする。」「本校が目指している<学力がもっと伸びること>や<【社会を生き抜く力】を身に付けて卒業すること>にマッチするものである」と説明した。

### <感想や状況・4>

- ある意味、“学校行事”のようなもの。  
実施にあたっては、事前・事後の対応やテスト監督等で、ほぼ全ての教職員が関わった。
- 特別時間割を編成した。
- CBTには環境整備が必要。



★「高校生のための学びの基礎診断」は、あくまでも、「成果や課題を確認する」ためのもの。  
受験することが目的になったり、教職員の徒労感が増したり・・・ましてや、学校間の“序列化”につながるものになるならば、高校としては、受験を躊躇するのではないか。→ハードルが高くなる

★事前（準備／授業）→実施→事後（結果返却／授業）の流れの中で、生徒のモチベーションや自己肯定感を上げ、教職員にとっても励みになるものに。

(21)

# 本校の取組、試行錯誤の中から・・・

(22)

## 「高校生のための学びの基礎診断」に期待すること③ ～本校の取組の中で出てきた声から～

<教職員の声・1 : 「学力」とは？「主体的・対話的で深い学び」とは？ パラダイム・シフトとは、何から何への変換なのか？>

<教職員の声・2 : 課題設定の適切さや問い方、内容は？ 思考力・判断力・表現力を見取るには？>

<教職員の声・3 : 多面的で、客観性がある評価とは？ 学びに向かう姿勢や人間性を見取るには？>

<生徒の声・1 : 今学んでいることや、授業での学習活動等は、卒業後（進学後、就職後）と、何がどうつながるの？>

<生徒の声・2 : 私たちは、「社会で求められる資質・能力」には、こんなイメージをもっています・・・！（アンケート結果から）>

★考査や既存の測定ツールとクロスできるものであれば、日々の授業との距離感が縮まり、活用をイメージしたり、具体的な方法を検討したりすることができて取り入れやすい。

★「社会につながる学び」の実現に向けて、進学先で求められる資質・能力や<社会人基礎力>等で示されているものとリンクしていれば、活用の幅が広がる。（教科＋総合的な学習の時間、教科間連携など）

★教職員にとっても、「学びや発見」、「実践に向けての具体的な示唆」があるものになってほしい。

(23)

### <外部試験以外の「測定ツール」としては、例えば・・・>

資料2-3

滋賀県モデル 「CAN-DOリスト」



資料2-4

玉川高等学校 <生徒の成長モデル>



(24)

# 滋賀県モデル 「CAN-DOリスト」



●滋賀県モデル「CAN-DOリスト」では、能力記述文を以下のように構成しています。

**Task** どのようなことをするのか  
**Text** どのような英語を使って  
**Condition** どのような条件や状況で

(例)「聞くこと」レベル7の能力記述文

ゆっくりはっきりと話されれば	Condition
興味・関心のある事柄や身近な話題に関する短い話を	Text
一度聞いただけで	Condition
その内容を理解することができる。	Task

<作成の方針>

- ★学習指導要領を踏まえたものとする。
- ★主として教員が生徒の指導と評価の改善のために活用することを目的とする。
- ★日常での言語活動に近い「生徒が英語を使っている姿」をイメージしてできる記述文で示した。
- ★生徒の英語力を測る尺度としての活用だけでなく、生徒がモチベーションを上げ、成果を実感できるものを目指した。

<作成の概要>

- ★中高一貫した英語学習到達目標を提案するため、中高の教員が協働して作成し、レベルを「中高で12段階」に設定。
- ★作成段階では、CEFERも参照した。
- ★配付後は、各校で“自校のカスタマイズ版”を作成。

## 「CAN-DOリスト」= 英語学習到達目標を段階的にリスト化し、4技能ごとに示したもの。

学習指導要領を踏まえ、外国語科の特性に応じた評価の観点及びその趣旨は以下のとおりである。

**外国語科「観点別学習状況の評価」**

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
コミュニケーションに関心をもち、積極的に話したり書いたりして、情報や言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。	外国語で話したり書いたりして、情報や考えなどを適切に伝えている。	外国語を聞いたり読んだりして、情報や考えなどを的確に理解している。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けているとともに、その背景にある文化などを理解している。

〈「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標を設定する目的〉

- 学習指導要領に基づき、外国語科の観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用すること
  - 学習指導要領を踏まえた、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成し、外国語によるコミュニケーション能力、相手の文化的、社会的背景を踏まえた上で自らの考えを適切に伝える能力並びに思考力・判断力・表現力を養う指導につなげること
  - 生涯学習の観点から、教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者として主体的に学習する態度・姿勢を生徒が身に付けること
- ↑【各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標のための手引き】  
(H25.3 文部科学省初等中等教育局) から抜粋

<「CAN-DOリスト」の活用にあたっては…>

- ★「観点別学習状況の評価」の4観点のうち、「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」について設定されているもの。ただし、学習評価にあたっては、4観点を総合して行うことに留意する必要がある。
- ★4技能ごとに示されているが、授業においては、「4技能(聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと)を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成すること」に留意する必要がある。

# 玉川高等学校 <生徒の成長モデル>



玉川高等学校 生徒の成長モデル		目指す生徒像						各教科でのアプローチ							
知・技	生徒に付きたい力↓	基礎段階		応用段階		発展段階		国語	歴史 公民	数学	理科	保健 体育	芸術	外国語	家庭
		共通指標	教科での具体化	共通指標	教科での具体化	共通指標	教科での具体化								
	<b>知識・技能</b> 1年次配当の科目における教科書レベルの重要事項を概ね理解している														
思考力・判断力・表現力	<b>論理的思考力</b> ：様々な角度から考え、分析し、深める力														
	<b>公正公平な判断力</b> ：得た情報を的確に理解し、ふさわしい意思決定ができる力														
	<b>言語表現力</b> ：得た情報や自分の考え・意見を、明確かつ適切に伝える力														
学びに向かう力・人間性等	<b>主体性</b> ：自律的・主体的に粘り強く学ぶ態度や姿勢														
	<b>協働する力</b> ：他者と協力し、成果やよりよい結果を出す力														

※「生徒に付きたい力」：授業等の学習活動を通じて育成を図る資質・能力です。各教科での取組が、総合的・相乗効果的に生徒の資質・能力を向上させることを目指しています。  
 ※評価指標の活用：生徒は「自分を振り返るツール」として活用する。 / 教職員は「自分の教育活動（教育効果）を振り返るツール」として活用するとともに、定期的に生徒の自己評価を確認する。

## 「高校生のための学びの基礎診断」は、 学校にとって、貴重な の機会の一つ

- ①どんな力を付きたいのか
- ②それを体現した生徒はどのような姿をしているのか（目指す生徒像）

### 目的・目標

- ⑤評価方法、測定ツールは何か（成果、生徒・教員の変化）
- ⑥「節目＝力を発揮する」機会を設定しているか（年間数回）

### 評価・見取り

- ③そういう姿に導くために、日々の授業はどのように工夫されるのか
- ④目標を意識したうえで、各自「持ち味」を活かした指導をしているか

### 指導・方法